

## 中村桂子論

和田 勉

一

中村桂子は、「生命」をキーワードにして、現代社会の諸問題を生命科学の立場から考察している。生命科学の視点から人間や生命がどのように解明されているか詳しく検証したい。

『生命誌の世界』（平12、日本放送出版協会）の中で、「科学は、どういふわけか社会の中に文化として存在していません。科学も音楽、絵画、文学、スポーツなどと同じ文化です。科学を文化として捉え、他の文化活動とも結びつけ生命誌を豊かなものにする努力もしていこうと思います。知る楽しみ、美しいものを感じる喜びを生命誌の中に見つけ出し、日常の一部にしていただければ幸い」と述べており、『生命科学と人間』（平1、日本放送出版協会）の中でも、「文化としての科学を日本の中に

育て」ることが「私の最大の関心事」と述べている。また『生きものの感覚で生きる』（平14、講談社）の中で、生命誌について、「ゲノムという新しい切り口を用いているのでとっつきにくいと感じられるかもしれませんが、ゲノムを通して、生きるということを経・横・斜めとあらゆるこちらから眺め、ときにはゲノムを分析してはたらきを調べるなどして、生きものの物語を読み取ろうという作業です。求めていることは、美術・文学・演劇・音楽など、人間が人間らしくあろうとすると浮かび上がってくるさまざまな活動と重なりあう」と述べている。このように、科学を文化として捉えたいといった言説は、中村の中で特別な意味を持っており、生命誌という考えにもつながっている。

『生命誌の窓から』（平10、小学館）や『生きものの感覚で生きる』等では、もはや専門の生命科学という分野に捕らわれずに、生命という視点から人間や社会について随想としてまとめられている。環境や人口や食糧などの諸問題についても、客観的な事実を見据え、広い視野から考察し、具体的な提言を行っている。「わたしたちの『知』がより深く、より広く、総合的なものになっていくための役割をいまの生物研究は果たしている」（『あなたのなかのDNA——必ずわかる遺伝子の話』平6、早川書房）というような自負が中村には窺える。<sup>註1</sup>

中村の説く生命科学の独自性について明らかにしたい。この

ような自然科学の文章も、広く評論という範疇で捉え、考察の対象とする。生命科学という学問自体が、もはや単なる自然科学の一分野ではなく、人間とは何か、生命とは何かというような人文社会科学的な思考をも包含した総合科学であり、理解を深めることが必要だと思われるからである。『中村桂子対談集——ゲノムの見る夢』（平8、青土社）の多田富雄との対談の中で、中村は「人文・社会系の方たちが生きものの実体をもう少し知って、生命論を闘わせてほしい」と述べている。一方、吉田瀬生は「鼎談 日本の近・現代文学と生命観」（「解釈と鑑賞」別冊、平8・2）の中で、多田富雄の「生命の意味論」を採り上げ、「文学史上の『生命』を考える場合も同時代の生命科学の成果は視野に入れておく必要がある」とか、「生命科学の奥にある思想的・文学的な問題を引き出すこと」を説いている。これらの言説は、文学に関わる者も文学を対象としてのみ取り扱うのではなく、時代を切り拓く自然科学などの新たな知見とどう関わるかということにつながるだろう。また『まど・みちおのころ』（平14、佼成出版社）の中でも、中村は「科学と文学と分けて水と油のように考える人がよく見られますが、関心の対象は同じ、『人間』『いのち』『自然』『宇宙』なのですから、決して異質のものではありません。そして二つを結びつけるのは、やはり言葉」と説いている。以前であれば、人間の心については哲学や宗教や文学に答を求めてきたが、科学の面からの解明

の方法を加えようとしているのは、客観的、合理的に明らかにしたいという時代の要請の表われであろう。

中村の生命科学をめぐる言説を通史的に捉えた上で、それらを持つ意味を同時代のパラダイムを通して見てゆきたい。ただし理系の学問として解析しているところ<sup>註</sup>についてはできるだけ触れず、あくまで生命科学の視点から現代社会への文明批評とつながるところを中心に分析したい。

二

中村の思想の変遷について、詳しく考察したい。つまり、どのように変化したか、どのようなきっかけで変化したか、ということについて具体的に解明したい。それは、中村が「二世紀へのまなざし——生命誌の立場」（東倉洋一編『22世紀への手紙——生命・情報・夢』平13、N T T出版）の中で、自身の活動について「一九七〇年頃に分子生物学から生命科学へと転換し、一九八五年頃に生命科学から生命誌へと変わった」と述べていることを詳細に見ていくこともある。

中村は村上陽一郎・軽部征夫などとの共著『化学に未来を託す』（平6、丸善）の中で、大学で化学を専攻し、「そのまま化学の中で暮らすつもりでいたのです。ところが、大学三年生のとき、一九五八年ですが、DNAという物質に出会ってしま

ました。(中略) 当時、二重らせん構造をとっている物質などは、何ともはや不思議で魅力的で、物質の世界にこういう構造があることに魅力を感じました。そこから生物の世界に入り、生化学や分子生物学を中心に考えてきた」と述べている。大学三年の頃、DNAの構造の魅力にひかれ、化学から生物学に移行したことが分かる。中村は『北里柴三郎——破傷風菌論』(平11、哲学書房)の中で、北里について、「これから病因としての微生物の研究が始まるという、医学の歴史の中でも最も華やかな時代の幕開けの頃にその道へ向って行った」と述べている。

北里の才能の開花と時代とのつながりに関して言及しているが、これはそのまま中村と分子生物学の幕開けの時代との関わりにも当てはまると言える。中村自身、『生命科学者ノート』(平12、岩波書店)の中で、「大学院に入って勉強した分子生物学は、ちょうど芽が伸び始めたばかりの若い学問でたいへん面白く」と記していることが、それを裏付けている。

『生命科学者ノート』に拠ると、一九七〇年に恩師の江上不二夫から生命科学という言葉を初めて聞かされ、「翌年六月設立された三菱化成生命科学研究所に入っ」ている。生命科学という学問の特質について、『生命科学』(平8、講談社)の中で「研究対象が生物であり、最終的にはすべて人間につながっていく科学であるために、科学そのものの中に潜在している危険性への考慮が重要である。これまでの自然科学は、科学自体の中に

存在する危険性を予測したり、科学の進歩にある程度の規制を加えるシステムをもつということとは考えなかった。生命科学はその研究が内蔵している有益性と危険性の両刃の剣をみつめていく部分を、いつも自分の中にもち、フィードバックしながら進んで行こうとしている点でも、新しさをもっている」と記している。分子生物学を研究する中から、師の導きもあり七〇年代に特に生命科学に注目している。それは、「第二期の分子生物学への幕開け」の時代とも重なっている。

この第二期に当たる七〇年代の分子生物学の課題を、中村は『生命科学』の中で三つ挙げている。第一に、「生命の歴史性、生命はどのようにして生まれ、進化してきたのかということである。第二は、人間のような多細胞生物が一個の受精卵から発生し、分化していく時、その途中でいったい何が起きているのか、これを調節している機構は何かということである。」第三に「神経系の作用、特に人間を頂点とする脳の働きのからくりは、いったいどうなっているのかということである。」このように「神経作用、性格や行動までが分子レベルで理解できる面がある」となると、このあたりから、生物学が人間や社会の問題と密接に関係し、人文、社会科学者との接触が必要になってくる」と指摘している。生命科学では、地球上の生物に共通して見られる生命現象を解明し、生き物としての人間がどのような存在なのかということを総合的な学問として解明しようとしている

ことが分かる。

『生命科学と人間』の中で、「遺伝子には、これまでの生命の流れが情報として入っているのです、これまで生き物がどのようにして生きてきたか、環境とどのように関わってきたか、も読みとれる素材なのです。これを調べてみない手はないと思うのです。そして、長い時間の流れを考えれば、おのずから人間の重みは感じられます。一方、人間が、人間がと大層に考えず、たくさんの生き物の一つじゃないかとする気楽さもまた、人間を見る目としてある」と述べており、人間を客観的に捉えている。遺伝子に焦点を当てることで、生命の歴史と多様性に注目していることが分かる。更に、「生命科学の出発点には現代科学技術への批判がありました。(中略)生物には制約がある。そこから脱出しようという願いを技術にこめてきました。ですから速く、大きく、効率よく。これらを進歩として、そればかりを求めてきました。これはどうもおかしい。それが生命科学の基本」と述べている。産業革命後二百年しか経過していないが、科学技術が環境や生命体に与える負の側面に注目している。そして生き物離れの危険性を説き、人間は生き物であるという原点を見据えるべきだと戒めている。「生命科学と人間というテーマは、あまりにも大きく複雑です。しかしその基本は、地球上にいる生き物たち、三〇〇〇万種類もあるといわれている生き物のなかの一つとしての人間という見方をする事、また生命

現象を徹底的に究明していくことによって、私たちの生き方や今後の科学技術のあり方に、新しい考え方が出てくるのではないかとまとめられている。生物としての人間についての理解を深めることで、どのような科学技術が本当に有益であるか、地球上のあらゆる生き物の存在を含めて検証しようとしている。

このように中村の著作には、種々の生き物の生命活動に対する確な洞察と、知性に裏付けられた豊かな人間性を感じさせるものが多く、文明批評的な要素も次第に増している。長い進化の過程で受け継がれてきた生き物にむしる学ぶという謙虚な姿勢がある。

『自己創出する生命——普遍と個の物語』(平5、哲学書房)の中で、「生命科学の中で仕事をしているうちに、自然に『生命誌』という分野が生れつつあることに気づき、それを自分の仕事にしよう、『科学』から『誌』へと移行しようという気持ちがある。明確になったのは、一九八〇年代の半ばのことだった」とある。八〇年代の半ばになると、DNAを遺伝子のセットであるゲノムとして見るようになっていく。還元、分析を基本にして機械論的に生き物を見るのではなく、ゲノムを通して、歴史性や全体性にも眼を向けるようになっていく。DNAの働きは大腸菌とゾウでは同じではないことが分かり、共通性を踏まえた上で多様性にも迫る必要が出てきている。

『生命誌の扉をひらく——科学に拠って科学を超える』(平2、

哲学書房)の中で、「科学の内部と外部から出てきた疑問を元に問題を整理しているうちにふと出てきたのが『生命誌(バイオヒストリー)』という言葉でした。そして、この言葉を思いついた途端に、変りつつある方向や、何が大事なのかということが見えてきたような気がし」たと述べている。また、「DNAという共通の要をつかんだうえで、そこから多様にのびている生物界に好奇心を向ける研究は生命誌(Biohistory)と名づけられないでしょか。生命誌は、DNAの中に書き込まれた歴史を読みとりながら、生命ってなんだろう、人間とは、と問うていく分野です。このように問うということは、単に問いが変わるだけではなく、生命研究には不可欠でありながら最近の生物研究の中では失なわれがちだった時間への関心、物語性、思想性、日常性などを取り戻すこととなります。それが、どうしても、『生命科学』ではなく『生命誌』として考えたい動機の一つを形成している」と述べている。DNA研究を基本にした生物学は生き物の構造と機能についての解明には成果を上げたが、生き物の歴史性と関係を見るために時間の視点を取り入れようとして生命誌に向かったことが分かる。

以上のように、八〇年代の半ばには自然や人間などをトータルに捉えた「生命誌」という言葉を創出して、生き物の学としての生物学を独自に展開するようになって<sup>注4</sup>いる。

中村は、生命誌という新たな学問分野を確立しているが、その内実について具体的に検証したい。生命・自然・人間・科学という四つのキーワードが、生命誌を理解する上で重要であると言える。

『生命誌の窓から』の中で、「DNA研究は、生きものをバラバラに壊して部品調べをする段階から、一つ一つの生きものがどのようにしてそれになってきたのかという歴史と全体に眼を向けたものに変わってきたのです。そこで、生命科学ではなく生命誌という名前をつけ」たと、その命名の由来を語っている。『「生きもの」感覚で生きる』の中でも、同様の趣旨のことに言及し、更に、「生命がどのように生まれ、どのように生き、私にまでつながってきたのか。そしてこれからどうつながっていくのかという物語として読み解きたいと思っています。自然を知る、生きものを知るということは、そういうことなのだと思っています。だから生命誌、つまり生命の歴史物語を読もうという仕事になった」と述べている。

『生命誌の扉をひらく——科学に拠って科学を超える』の「あとがき」で、「普遍・多様・個の関係を中心に生命の本質を捉え、そこから人間・自然、更には人工の世界をも見通したい。自然科学、人文科学、芸術などのように分化した形ではない総

合的な知に迫りたい。これまでは科学という分野の枠を出ないように自己規制してきたのですが、『生命誌』はそれをはずさせようとしているよう」だと述べている。生命誌という立場を明確にすることで、生命を基本として人間の存在意義を考えるのみならず、環境、人口、食糧、医療などの解決しなければならぬ課題を考える切り口になっている。その分析方法は複眼的であり、科学文明へのアプローチの仕方として注目すべきものがある。

『中村桂子対談集——ゲノムの見る夢』の村上陽一郎との対談の中では、「進化の過程の中で、チョウはチョウに、ヒトはヒトになってきたわけで、歴史的存在なのです。そこで、それを知る学問は、生命『科学』ではなく生命『誌』という新しい時代に入ったと思った（中略）生命を科学的に理解しようという分野の中に自分を規制して考えてきた結果、『生命誌』という考え方が出てきた」と述べている。科学を探求し続けたところ、生命誌につながったというのである。また、「DNAの分析は、約二〇年でこれだけの展開をするような事実を積み重ねたのですから、すばらしいと評価できます。けれども、それを単なる分析による知識の集積に止めずに、考え方の転換をする素材と見たい」と述べている。自然科学の分野に留まらず、人間や生命についての「考え方の転換」を図ろうとしているところが重要である。分子生物学から新しい法則が導き出され、人文科学や

社会科学を含めた新たな知見が生まれるかもしれないというのである。

『生命誌の世界』の中では、「今の科学は、時に生物をまったく知らずにDNAだけを扱っている人をつくってしまふ方向に動いています。（中略）生命に関しては、断片的な知識への関心だけをもったり、科学という限られた方法でのアプローチだけをするのはいけないのではないか、そう考えて十年近く悩んだ結果、『知』は大切にしよう、しかし『統合の知』もしくは『知恵』にしようと思ったのです。もちろんこれは挑戦であって完成ではありませんが、生命誌を少しずつこの方向に組み立てて行きたい」と述べている。科学者が先端技術の競争や技術開発に明け暮れ、社会からかけ離れた存在になっている現状には批判的であることが分かる。学問を専門化、細分化の方向へ進めるのではなく、総合化された知の必要性を強調している。年々更新され、細分化される科学技術を追いかけるのではなく、科学をそのように前進させていくことと生命との関わりを問うことを求めている。生命を中心に考えることは、人類の文明を正しく導くためにも必要であり、科学自体の進歩をより確実なものにするためにも望ましいと説いている。つまり、生命誌という考えに即して知の体系化が目指されている。生命誌という視点を導入することで、現実認識そのものに根源的な変容を迫っていることが分かる。

「二二世紀へのまなざし——生命誌の立場から」の中で、生命誌について、「二〇世紀の『科学』と『科学技術』を二一世紀の『知』と『暮らし』へと転換する役割を果たせるのではないかと述べている。生命誌という学問を提唱することによって、従来の学問の磁場を変容させ、人々の認識の仕方を変えることを促している。生命誌という言葉によって、それまで分かりにくかった概念が明確になり、語られるべき現実を明瞭に打ち出している。科学文明の発展と環境破壊や汚染の続発によって、二十一世紀では、人間の生命が、人間の作り出す原因によって脅かされており、このような現実には警鐘を鳴らし、発想の転換を切実に求めている。

『中村桂子対談集——ゲノムの見る夢』の多田富雄との対談の中で、中村は、「個体発生と系統発生の中で系統発生が生まれた。その過程を『ゲノム』という形につくり上げた。それが個体発生のための情報となる。この入れ子関係が面白い」と述べている。個体発生と系統発生との二つの発生系こそ生命現象の根本だと捉え、中村は自己創出系と呼んでいる。すべての生き物がDNAという共通の物質によって成り立っているが、ヒトが持っているのはヒトのゲノムであり、チョウが持っているのはチョウのゲノムであり、DNAは生きている細胞の中にゲノムとして存在している。すべての生き物はDNAという同じ物質を使い、しかもDNAの基本的な性質は自分と全く同じもの

を複製するところにあるのに、結果として生まれる個別の生き物は多様であり、他のどこにも存在しない個体を自己創出するところに注目している。

次に、中村が翻訳している生物学者の著述と対比したり、援用したりしながら論じている。まず、ロバート・ポラックとの関わりについて見ていきたい。ポラックの『DNAとの対話』に拠ると、ポラックも五〇年代にDNAの構造の魅力にひかれ、物理学から生物学に研究内容を変更している。また『DNAとの対話』の「序」の中に「ヒトのDNAを文学作品、偉大な歴史物語と考えるという概念のもとにこの本を書きはじめた」とあり、「歴史物語」と捉える視点は中村と共通している。『DNAとの対話』には「DNAを物語と考えると、悠久の時間をかけて一つの作品を書きつづけている作家は自然選択だ」とあり、「文学作品」というのは比喩的な言い方であることが分かり、考え方自体は中村と似通っている。二人ともゲノムに注目することでパラダイム転換を目指しており、歴史性を取り入れた分子生物学によって、人間の起源と歴史を説明しようとしている。また、ヒトという種は多様な生き物の中の一つにすぎず、科学に起因する環境問題を生物学の視点から捉え直そうとしているところも両者は共通している。「訳者あとがき」の中で、中村自身も「組み換えDNA技術が登場した時にその社会的な問題に関心を持ち、それ以来、DNA研究の進歩を楽しむ一方、そ

れの持つ社会的、思想的意味を考えてきたという点でも共通点がある」と認めている。ただし、相違点について中村は、日米の文化の違いというような観点から主に言及しているが、研究そのものの違いや独創性という観点からも言及すべきであろう。

ポラックの『脳の時計、ゲノムの時計——最先端の脳研究が拓く科学の新天地』（平12、早川書房）との関わりについて見ていきたい。中村は人が連続した時間の中の「今」を生きることに、遠い過去からの記憶も併せ持つっていると捉えたが、ポラックはそれらのことが行われている人の脳に特に注目している。

また、ゲノム情報についての権利と法制度との関わりに言及しているところも共通している。「訳者あとがき」の中で、中村が「生物、とくに人間について考えるときに重要なのは、科学的知識と知恵の二つを上手に組み合わせることだというのが著者と私が共有する視点だ」と述べているのが参考になる。二人ともDNA研究に偏るのではなく、生命科学研究によって社会の中での科学のあり方を洞察することを目指している。

マット・リドレーの『ゲノムが語る23の物語』も、遺伝子研究をめぐる種々の内容を分かり易く説明しているという点では中村と共通している。どちらも特にヒトゲノムの解析を通して、人間の歴史や本質を説明しようとしている。ただし、『ゲノムが語る23の物語』は表題に示されているように、科学的な内容を二十三章という染色体と同数の話に構成することで説明してい

る。そのため科学的な読み物という色彩が濃くなっている。

リン・マーギュリスの『共生生命体の30億年』（平12、草思社）は、地球上のあらゆる生命体の長い進化の歴史の中でヒトを捉え直すという点では中村と共通している。二人とも、人類が選ばれた特別の種であるという傲慢さを戒めている。また、分子生物学の研究に長年にわたり携わること、長い進化の歴史を実感的に記すことでも両者は共通している。『共生生命体の30億年』では、特に細菌などの共生に注目することで、生命の進化の歴史を綴っており、中村は「訳者あとがき」の中で、共生について「それぞれの生物が懸命に生きようとし、時には闘いながら、結局そこに落ち着いた姿」と捉えている。

平成十三年の養老孟司との共著『生命の文法』の中で、中村は「当面ゲノムに注目し、その歴史性と関係性を説明していくという生命誌を続け、その中で、世界中で出されるゲノム解析のデータによって見えてくるに違いないゲノムの中の文法、できることならそれと言葉との関係に注目していきたい」と述べている。これはポラックが『DNAとの対話』の中で「ヒトゲノムの言語としての性質、つまり構文、文法、意味関係などを知るには、遺伝子がどのように細胞に情報を伝えるか、その情報がどんな意味を持つかに注目しなければならない」と述べていることと重なるような観点であろう。<sup>註10</sup>

更に、中村の特質を明らかにするために、竹内久美子<sup>註10</sup>との違



いについても言及したい。竹内が自己の大胆な仮説を積極的に展開するのと比べると、中村は自己の仮説を展開することには慎重である。また、竹内がヒトの男と女に焦点をしばって生物学的に捉え、読み物として展開しているのに対して、中村は、あらゆる地球上の生命体を同等の視点で捉え、リアルに綴っている。竹内が分子生物学や動物行動学の成果から得られた興味深い話をユーモラスに展開するのと比べると、中村は分子生物学の研究の実情を踏まえて説得力のある穏当な説として展開している。竹内の随想では、遺伝子と表面に現れる性質を大胆に結びつけて展開するあまり、非学問的な言説が垣間見られるが、中村の場合は、表現としても学術的で着実な文章である。

## 四

移植医療や遺伝子組換えなど科学技術の進歩に伴い、ますます生命についての哲学が求められている昨今では、中村の考察は意義深い。『中村桂子対談集——ゲノムの見る夢』の河本英夫との対談の中で、「生物学の中で明らかにしたこと外の世界の方もわかるような言葉で伝え、実体を踏まえながら感じたことをいろいろな分野の方に提示する必要性を感じています。新しいものができ上がっていくための素材として提供したいわけです。明確な思想を組み立てられるかどうかわかりませんが、

とにかく、生きものを見つめようという気持ち」と述べている。そこには、生命を核にした新たに普遍的な考え方につながるものを探究する真摯な姿がある。ただし、生命といってもその考察の対象は多様な生物に及び、地球規模であるため、容易なことではない。

中村は、遺伝子というミクロの側面から生命について総合的に考察し、文系や理系といった枠にとらわれない学問の可能性を探っている。ゲノムで言う自己について、日常的には実感できないところに、この学問を伝えることの難しさがあるだろう。ただし、中村は「四十億年という時間は時計で測ったらとんでもなく長い時間なので、実感とはほど遠いものになります。私のなかにあると思うと意外に身近になります。この感覚が、生きもの研究をしていると得られてくる」（『「生きもの」感覚で生きる』というように、実感的に捉えていることが分かる。中村の生命誌という学問の根底には、生命あるものへの愛着や畏敬の念が込められており、そこには、女性としての視点も活かされている。生命誌について著作などを通して啓蒙活動を行うことが中村の存在意義であり、自己を通して生命誌という学問の内実を実感しつつ表出しており、複眼的に捉える必要がある。なお「頭で考えるだけでなく、自分の考えていることを具体化する場<sup>註</sup>」としての、あるいは「ゲノムを実感あるものとして伝える方法を考える」場としての生命誌研究館の活動も意義深い。

そこでは、科学が文化として日常生活につながるにはどうあれ  
ばよいか模索され、示されている。<sup>注12</sup>

中村の著書は、いずれも生物学の視点から捉えた文明批評の  
要素を含んでおり、そこには現代への危機意識が投影している。  
明晰な科学の論理を、分かり易い日常語を用いて語り、遺伝子  
組換え食品、クローン技術、環境ホルモンなどの諸問題にも鋭  
く切り込み、提言を行っている。内容は多岐にわたるが、その  
根幹に貫かれているのは、生命を尊び、人間らしく生きたいと  
いう希求であり、生命活動というものを追究してやまないひた  
すらな姿勢である。『生命科学と人間』の中で、「生命科学から  
の提案としては、技術の生物化、生物の利用、生物に学ぶ、と  
いう三つをあげたいと思います。生物は情報化されたみごとな  
システムですから、今後この線での技術開発の可能性には大き  
なものがある」と述べているようなところは傾聴すべきであろ  
う。人間も自然の一部であり、他の生命体と関わりあつて生き  
ていることを主張し、科学文明に依拠しすぎる人間に対して警  
鐘を鳴らしている。

人間を両義的な存在として捉えており、つまり、三千万種に  
及ぶ生き物の一種として捉える一方で、文明を発展させた独自  
の存在として捉えている。また、通時的に見れば、多様な生命  
が独自の進化を遂げたが、共時的に見れば、すべてが共通の遺  
伝子から成り立つ生命体であるということで、両方の認識によ

って捉えている。更に、「今、生活している私は、自分の体の中  
に、種としての歴史と自分の誕生以来の経歴を組み込んでいる」  
（『生命科学』）、つまり、「種のレベルでいえば進化であり、個  
体のレベルでいえば、一生、すなわち、一つの生体が生まれ、  
維持され、やがて消滅する過程」（同前）ということで、人間を  
両義的な存在と捉えている。これは、明治時代から言い古され  
てきた近代的自我という個人の内面を重視する捉え方を、生命  
科学の視点から相対化するということでも機能していよう。た  
だし、それは人間の活動が、遺伝子の情報によって決定される  
ということを意味しているわけではない。生物としての人間の  
活動は、遺伝子のプログラムに規制されているかも知れないが、  
それですべてを説明できるはずもない。あくまで遺伝子を通し  
て見えてくるものを捉えるということで、人間の内面の活動に  
も影響を及ぼしている可能性があるというにすぎない。

中村には、「我々人間も生態系の中の一員として生きている生  
物である。我々が自然を求める気持は単なる感傷ではなく、人  
間の中にある生物としてのヒトの声である。その声に耳を傾け、  
大事にしたいと願う気持ちだが、生命科学を支えている」（『生命  
科学』）という確固たる信念がある。種々の学問的な手続きを経  
て、自己の思考について明快に記している。中村の著作は、学  
説などを紹介しているというよりも、むしろ読者に生命科学の  
世界への手引きをしている。現実認識だけにとどまらず、今後

の指針の提示にまで迫ろうとしているところが意義深い。生命科学を学ぼうとする者にとって、問題の方向性を指し示してくれる基礎的な教養書としても役立つものとなっている。該博な知識を踏まえながら、穏当な結論に至っており、説得力があると言えよう。そこに貫いているのは、生命の歴史と多様性を十分にわきまえた、謙虚な科学者としての姿勢であって、人間を含めた生命の意味を真摯な態度で説いている。『生きもの』「感覚で生きる」の中でレイチェル・カーソンに言及して、「大事なことをきちんと言え、目とバランスのある見方はとても参考になります。身近なことから出発したうえで、客観的な事実を見据え、広い視野から問題を考えていく。偏った立場から騒ぎ立てるのでなく、建設的な提言になり、新しい社会への道につながる」と述べている。また『あなたのなかのDNA——必ずわかる遺伝子の話』の中でマキシン・シンガーを採り上げ、「シンガーは科学者のやるべきことを二つあげています。一つは『科学の実態を広く深く伝えること』。第二は『科学も科学者も、基本的に人間的なものなのだ』ということを理解してもらおうこと』。わたしも本を書くとき、話をするときはいつもこの二つをこころがけてい」と述べている。このようなカーソンやシンガーの科学者としての姿勢は、そのまま中村に継承されていると言える。

中村の学問体系は、生命誌の追究の一点に集約されると言っ

てもいいだろう。生命誌という新たな学問の成立と推進に先導的役割を果たした功績は評価できる。生命誌という新たな知の領域について、存在論的にそれらはいかなる可能性を持ち存在するのか、あるいは認識論的にいかにそれらを知り語り得るかなどと探究していくことが、中村の探究の目的としてあったと言えるだろう。生命誌という新たな学問分野を確立することによって、地球上のすべての生命という空間的な広がり、生命進化の歴史という時間的な広がりを取り込むことが可能になっている。そして学問分野の境界を越えて、独自の生命観、人間観を提示したところに意義がある。今後は、生命誌という学問を、一つの科学として更に組織化し、体系化して明確に提示することが求められよう。また、生命科学の研究成果を踏まえて、他の学問分野のみならず、社会システム全体までを含めた変革への考察がもっと具体的に示されるべきだろう。ただし、未来に向けては、科学によって人類にとっての未知の領域を切り拓くことになり、生命や人間の根幹に関わる課題に直面することも少なくないであろう。

関井光男は「知の挑戦」(『国文学』平15・8)の中で、「文化的知性に代わって21世紀の新たな思索者として科学的知性の言説は登場してきた。『知の挑戦』を著したエドワード・O・ウィルソンはその一人である。彼は『社会生物学』で『知』のパラダイム・チェンジを提示して現れたが、現状を打破して人間の

精神活動を活性化させている優れた科学者はこのほかにも数多くいる」と述べている。このような日本の科学者としては、『私』はなぜ存在するか——脳・免疫・ゲノム』の共著者である養老孟司や多田富雄や中村の名を挙げる事ができよう。それにしても、現代は臓器移植やクローンや脳死など生命についての根源的な問いかけが科学の側から提示されている。今日の問題はあまりに複雑であり、解決に至る難しさがある。だが、それらについて生命科学の立場に抛りながら、論理に裏打ちされた粘り強い思考を展開する中村の存在は貴重であると言える。

古来の哲学者が求めた「人間とは何か」の問いに、現代の科学のレベルで答えているのは意義深い。それは中村桂子編『愛づるの話』(平16、新曜社)のように大和言葉の「愛づる」<sup>注3</sup>をキーワードにした人間や生命についての考察にも示されている。ただし、文学などの芸術と同様の境地に達しようとするれば、生命科学という学問もまた表現する側が個人の全存在、全人格をもって表出すべきであると言えるし、そこまでの覚悟が求められよう。

注1 中村が翻訳しているロバート・ポラックの『DNAとの対話——遺伝子

たちが明かす人間社会の本質』(平7、早川書房)の中にも、「現代の分子生物学者は、これまでになく、科学が持っている政治、経済、社会への影響に関わりあう機会を持つことになった」とある。

注2 関井光男は「エドワード・O・ウィルソン『知の挑戦——科学的知性と

文化的知性の統合』(『国文学』平15・8)の中で、「21世紀に入って科学的知性と文化的知性の間にドラステイックな変貌が起っている。それもつとも顕著なのは、文化的知性の言説が衰退し、科学的知性が現代の先端を切り拓く存在として出現していることである」と述べている。

注3 松原謙一との共著『生命のストラテジー』(平8、早川書房)等は、専門分野の理系に関する内容が主である。

注4 『中村桂子対談集——ゲノムの見る夢』の榊山紘一との対談の中で、この時代の生物学界の動向を大局的に捉え、「五〇年代からDNA研究が始まり、七〇年代にさまざまな生物のDNA分析が可能になり、九〇年代には、ゲノムという形で全体像への挑戦が始まった」と述べており、中村の活動もほぼこれと連動していることが分かる。

注5 『中村桂子対談集——ゲノムの見る夢』の「はじめに」の中でも、「生命科学から生命誌(バイオヒストリー)へと移行することによって、科学を基礎にしながらも普遍と多様や個、部分と全体、還元と総合など、これまで日常的に見る生命と科学を対象にする生命との間に存在したギャップが埋まり、しかも考えに広がりを持つると思えるようになった」と述べている。

注6 中村が翻訳しているマット・リドレー『ゲノムが語る23の物語』(平12、紀伊国屋書店)の中にも、「ゲノムを読み解けば、ヒトの起源や進化ばかりか、その本質や精神も、これまでの科学的成果を上回るレベルで明らかになるだろうし、人類学、心理学、医学、古生物学をはじめ、あらゆる学問に革命をもたらすはずだ」とある。

注7 マーサ・C・ナスバウム、キャス・R・サンスタイン『クローン、是非か』(平11、産業図書)、ロバート・ワインバーグ『裏切り者の細胞が人の正体』(平11、草思社)、ロバート・M・サポルスキー『ヒトはなぜのぞきたがるのか』(平11、白揚社)等も翻訳しているが、これらは表題が

示しているような個別のテーマについてまとめられたものであり、中村の著述活動とは直接には関わらないので、あえて本稿では採り上げなかった。

注8 『中村桂子対談集——ゲノムの見る夢』の多田富雄との対談の中で、中村は、「ポラックの『DNAとの対話』という本を翻訳したのですが、あまりにも私の考え方と似ているところが多いので驚きました。言葉とDNAを並行的に考えていくのは面白いと思います、今、『言語』に関心を持っている」と述べている。

注9 マット・リドレーの『ゲノムが語る23の物語』の中でも、DNAを「単純なアルファベットで記された暗号——つまり言語」と捉えている。

注10 詳しくは、拙稿「竹内久美子論」(九州産業大学国際文化学部紀要)26号、平15・11)を参照頂きたい。

注11 『私』はなぜ存在するか——脳・免疫・ゲノム(平12、哲学書房)の中の中村の言葉。

注12 『生命誌の扉をひらく——科学に拠って科学を超える』の中では、生命誌研究館の三つの活動として、「生きもののふしぎを知りたいという知的欲求を満たす実験の場」であること、「新しい生命観、自然観、人間観を産み出していく作業」、及び「次世代に生命の魅力を伝えていくこと」を挙げている。

注13 『愛づるの話』の佐々木丞平との対談の中で、中村は「愛づる」について、「単にきれいだから可愛がるという事ではなくて、本質を見つめて知ろうとする行為」と述べている。